

ELSIの「E」の不安定さ、困難さ、重要さ

—倫理学から再び「E」を問う—

大阪大学 社会技術共創研究センター 特任助教 ながと ゆうすけ 長門 裕介

「企業は自らの開発した技術や製品、サービスの倫理的・法的・社会的課題（ELSI）を考慮し、それについて責任を負うべきだ」という文言を見て、それにまったく反対である（つまり、「そのようなことを考慮する義理はないし、なにも責任を負う必要はない」と考える人はごく少ないように思われる。少なくとも、私は（一市民としても ELSI 研究者としても幸いなことに）そのように公言する人に会ったことはない。しかし、そのような一般論から一步踏み出して、「では、この技術（ないし製品）が法的・倫理的・社会的観点に照らして非のうちどころのないものとなるためにどのようなアクションを取るべきか」と言われたら、多くの人は多少なりとも考え込んでしまうのではないか。

もちろん、新規技術の研究開発にあたっては現在でも多くのセーフガードは用意されている。生物や環境へのインパクト・アセスメント、種々の倫理審査、既存の法令に照らした適法性のチェック、知財関係の確認、ハイプ（誇張）を防ぐためのプレチェック、ユーザーテストに基づくフィードバックなど、当該技術の種類や開発段階によって程度の差こそあれ、さまざまなチェックをめぐり抜けて技術は私たちの社会にローンチされることになる。

それで十分ではないか、という声もあるだろう。不幸にも、そうしたセーフガードをすり抜けて、痛ましい事故や看過できない社会問題が発生することはありうる。だが、そうした際に企業が実際にできることは一定の説明責任を果たしたうえで必要な補償を行い、前述のようなセーフガードをいっそう強化することに尽きているのではないか、というわけである。

本稿の目的は、企業のこのようなプラクティス（慣行あるいは実践）がけしからんものであるとか不十分ということにはない。私が些かなりとも論じておきたいのは、ELSI をめぐる議論のなかで「E」つまり「倫理」という観点がしばしば遊び駒になってしまうのではないか、ということであり、本気でそれに取り組むのであればそれはそう簡単なことではない、

ということの指摘である。

人々は倫理を求めている？

まず、2021 年に電通と大阪大学社会技術共創研究センターが共同で実施した「データビジネスにおける ELSI 意識調査」を参照しよう。

この調査では、調査会社のパネルを用いて 18 歳から 69 歳の男女を対象とし、日本の人口構成比に基づく分布で抽出した「一般生活者」20,000 名にデータビジネス ELSI に関する基本的な認知や課題意識を調べると同時に、そのなかに含まれている「企業データビジネス従事者」を設問回答から定義し、うち 1,000 名を抽出して実際にデータに携わるビジネスパーソンの課題意識を明らかにしたものである。

最初に注目したいのは「ELSI」という語の認知度が 20.4% と、予想外に高かった点である【表 1】。2014 年にデルフィス社が日本で実施した「第四回エシカル実態調査」では「エシカル」という言葉を知っていると答えた人の割合が 12% にとどまっていたことを考えれば、これはかなりの進歩であると言えるだろう（ちなみに、本調査において「ESG 投資」の認知度は 20%、「エシカル消費」は 24.1% である）。

次に、ELSI とはなにかについて改めて提示したうえで、データビジネス従事者に自身の業務と結びつけてどのような課題を連想するかを問う設問の結果を見よう【表 2】。

ここでは「今後、どのような倫理観が必要か」および「倫理的な観点から、どのようなビジネスをすべき

【表 1】設問「あなたは以下の用語についてどの程度理解していますか。該当するものを選んでください。「ELSI（倫理的・法的・社会的課題）」

	るがる説 でこ明 きとす	あこ聞 るとい がた	い知 ら な	るて「 し 計 知 っ
全体 (n=20,000)	3.4	17.0	79.6	20.4
企業データビジネス従事者 (n=2,235)	13.0	29.8	57.2	42.8
データビジネス非従事者 (n=11,438)	1.6	14.7	83.6	16.4

【表2】 設問「ELSI」とは、倫理的・法的・社会的課題（Ethical, Legal and Social Issues）の頭文字をとったもので、エルシーと読まれています。新しい科学技術を研究開発し、社会に実装する際に生じる、技術的課題以外のあらゆる課題を含みます。あなたに関わるデータビジネスにおいて、この「技術的課題以外のあらゆる課題」として思い浮かぶことを以下からお選びください。（複数回答）

回収数	(L課題) うな法律 課題の観 ネズ点が からでき るどのよ うかとい う	(L課題) え今後、 い、どの かという に法律を 変	(E課題) いう倫理 的な観 ネズ点を かすべ きかとい よ	(E課題) 必今後、 か、どの かという よくな倫 理観が	(S課題) とう社会 的な観 ネズ点が か望ま れど かよ	(S課題) かい今 とて後、 い、どの かという よくな倫 理観が	と市場競 争の利益 を上げる よう	に国際競 争の利益 を守るよ う	い統地 球規模を 担保する よ	その他	特にな い／わ からな い	L e g a l 計	E t h i c a l 計	i S o c i a l 計
(1000)	22.5	16.9	31.0	32.5	28.7	30.2	21.7	18.2	23.0	0.0	12.6	33.3	49.8	46.8

注) 数値は回収数を100とした%。複数回答のため重複あり。

か」といった「E」課題がトップとなった。

最後に、そもそも「倫理」という用語をどのようなものとしてイメージしているか、つまり「できるだけめざすもの」か、それとも「絶対を守るべきもの」か、どちらにより近いと思うかを尋ねた設問の結果を見よう【表3】。ここでは、「できるだけめざすもの」55.2%、「絶対を守るべきもの」44.8%と、「倫理」という言葉のイメージが人によって大きく割れていることが確認できる。

以上から、少なくない人がELSIという言葉を多少なりとも知っており、ビジネスパーソンのなかには自身の業務の課題として「倫理」的なものを挙げる人の数も一定程度には存在するとまでは言えるだろう。しかし、この結果をもって、私のようなELSI研究者は自身の存在意義を安心して見出すことができるだろうか。問題は、「倫理」なるものが、並列される「L」や「S」とどのような関係をもっているかにかかっている。

「倫理」なんていない？

「倫理とはなにか」という話はひとまず置いておき、ELSIをめぐる議論のなかで倫理という概念がどのようにして不安定な位置に置かれるかを確認しておこう。（なお、筆者が専門とするのは情報科学技術のELSIであることから、以降の記述はそうした分野での研究を念頭に置いていることはあらかじめ断っておく。）

ELSIにおける議論において「E」の役割が不安定な理由のひとつは、そのようなモチベーションをもたずとも、私たちの社会では悪質な技術・受容されない技術は淘汰されていくように思えるからである。AI・ビッグデータの研究者である中西崇文は「人工知能は高

【表3】 設問「あなたは「倫理」というワードについて、次のAとBのどちらに近いと思われますか。A:「倫理」とは「できるだけめざすもの」だと思う/B:「倫理」とは「絶対を守るべきもの」だと思う」

回収数	Aに近い	ややAに近い	ややBに近い	Bに近い	Aに近い計	Bに近い計
(1000)	14.7	40.5	30.6	14.2	55.2	44.8

性能化し、社会に浸透すればするほど、安全・確実で、信頼できるものになっていくはずである。そうでなければ、危なっかしくて誰も使わず、淘汰されてしまうからだ」とする。この考え方を楽観論として一蹴することはできない。人工知能に限らず、多くの技術やそれをもとにした製品・サービスは、社会の中で多くの人がそれを使いたいと思えば定着・反映し、そうでなければ姿を消してしまう。その盛衰を決めるものはユーザーの選好や種々の利益といった「クールな」事情であり、企業はそれをもとにさらなる投資を行うか、撤退するかを判断する。そこには倫理という「ウェット」な動機づけは求められていない。

もちろん、あるサービスが極端に差別を助長するという理由からユーザーがそれを忌避したり、企業がその社会実装を取りやめたりというケースもありうる（悪意あるユーザーによって差別的な言葉を吐くようになったチャットボットがサービス停止になるような状況を考えてみよう）。しかし、そこでは倫理は「レピュテーション（評判）リスク」という営業上のリスクに還元されてはいないだろうか。そしてまた「倫理的課題」も「誰も使わない、を避ける」という「営業上の課題」に溶け込んでしまうように思われるのである。

上述のような「淘汰」による理論とまた別の極として、「倫理」なるものはおためごかしにすぎない、と

いう、これまた「クール」な意見が存在する。この立場からすれば、企業にとって倫理的対応とは、いくらでも振り出せるが決して現金化されることのない空手形にすぎない。法的な強制力をもつハードローの制定や強化を避け、自主規制といった申し合わせに基づくソフトローで済ませようとして持ち出されるのが法ならざる規範としての倫理である、ということである。

こうした批判は、いわば「身内」である情報法政策や応用倫理学の研究者からも為されている。EUのAI倫理のガイドラインの策定のための高度専門家グループ（High-Level Expert Group on Artificial Intelligence）に参加した哲学者のトマス・メツツィンガーは、倫理の名のもとに実質的な規制を骨抜きにしようとするテック企業の姿勢を「エシックス・ウォッシング（倫理洗浄）」という言葉を用いて批判している。エコフレンドリーであることを自ら謳う企業がことさらに自社製品のパッケージに緑色を用いたり、一般的に使われなくなった化学物質の不使用をわざわざ喧伝するといった仕方であらうだけのアピールを繰り返すことを「グリーン・ウォッシング」と言うが、これになぞらえて「倫理」を盾にして取り組まなければならない具体的な問題を曖昧にし、規制逃れを目指す姿勢が批判されているのである。

ここまで見てきたように、現在のELSI対応の現場において倫理的課題、「E」というものは、せいぜいが（どちらも事業の継続性に関わるという意味で）社会受容性に対応する「S」課題や法的課題をクリアする「L」課題のどちらかに還元されるか、あるいは規制逃れの方便や厳しい社会的批判への目くらましに使われるか、といったなんとも情けないものでしかない、少なくともそう思われても仕方がないものに留まるように見える。

倫理と妥協

倫理とはなにか、という大きな問いにここで答えることはできない。しかし、哲学の一部門として発展してきた倫理学は、倫理を「現実的な妥協」と離れた一種の「理想」としてイメージすることにさほど躊躇しない傾向があることは確認しておいてよいだろう。問題となっているのは「なにが本当に善いことなのか」であって、「どうしたら人から嫌われないか」といったものではない。

簡単な例として古代ギリシャの哲学者であるプラトンの対話篇『国家』を見てみよう。この本にはグラウ

コンという有名な人物が登場する。彼は「正義とは、不正を働きながら罰を受けないという最善のことと、不正な仕打ちを受けながら仕返しをする能力がないという最悪のこととの、中間的な妥協にすぎない」（359A-359B）とか「人々は、自分が不正を働くことができると思うときにはいつだって不正を働くものであり、強制されたときにしか正しく行為したりしない。というのも、彼らは正義とは本人にとって個人的には善くないものと見ているからだ」（360C）とうそぶく。グラウコンからすれば、正義とは「自己利益を追求して好き勝手にやる」ことを犠牲にする代わりに、「相手から害を受ける」や「（好き勝手にやったことの）仕返しをされる」ことを防いでくれるものである。注意しなければならないのは、グラウコンは「正義など存在しない」とか「正義など無意味だ」と言っているわけではない、ということである。グラウコンのボキャブラリーのなかにも「正義」というものは存在しているが、それは利害調整のためししぶ受け入れるものであり、その限りでしか力をもたない、というのがポイントなのである。

それに対して、哲学者であるソクラテスは正義というものがそのような情けないものであるはずがない、という強い確信を抱いている。グラウコンの言い分に従えば、正義に従うということは「自己利益の追求」という本人にとって最高の状態をあきらめているのだから、そのような人が全面的に（どこからどうみても）幸福であるということはある得ない。しかし、ソクラテスは正義とはそのようなししぶ受け入れるもの（そしてその結果として最高の状態から遠ざかってしまうもの）ではなく、正義はそれ自体目指されるものであり、また正義に即した行為をしている人こそが本当の意味で幸福であるということを証明しようとする。身体が健康であることはそれ自体望ましいことであり、またその身体を持ち主を幸福に導くのと類比的に、魂が健康であること、すなわち理性が欲望を制御していることはそれ自体望ましく、また本人を幸せにする、というのがその証明の方針の概略である。

その証明の正否はここでは詳らかにしないが、プラトンが『国家』のなかで、「本当に善いことはなにか」や「本当に幸福であるとはなにか」という仕方、「理想」を語ったことは重要な意味がある。頭の中で思い浮かべたことは単なる空想にすぎないが、理想は基準ないしモデルとして、現在の正と不正、幸福と不幸を判定するのに役に立つ。

端的に言えば、倫理学とは「現実はこちらだ（人間は、

本音では自己利益を追求したいのだが諸所の事情で諦めている。枷が無くなればいくらでも不正を犯す)」を直接否定するというよりも、「現実はどうかもしれないが、本当はそうあるべきではないかもしれない」というところから出発する学問なのである。

そしてなにより意識されなければならないのは、現実の場で不可避に生じる「妥協」というものも、この「理想」との関係のなかで初めて意味を持つのであって、理想抜きの妥協というものはありえないということである。「理想はどうかもしれないが現実には妥協せざるを得ない」という紋切り型の言葉が発せられるとき、本当に人は「理想」の内実を吟味しているのだろうか。理念としての倫理はそうした妥協ありきの思考を厳しく監視するために生じたそれ自体規範的な概念なのである。

「倫理」の苛烈さを重要視する

先に確認したように、ビジネスパーソンを含む数少ない人々が技術におけるE課題に直面し、それに対応する必要があることを自覚している。しかし、倫理というものをひとたび理想と関連づけて捉えようと、それが決して容易ならざるものであることがわかる。

E課題を倫理の問題として解決すること、つまりL課題やS課題に還元しない形でE課題に向き合うためには、まず自らの依って立つ倫理的理想を明らかにしなければならない。現在、多くのAI倫理原則が策定され、ELSI対応のフェイズも「原則から実践へ」、つまり尊重されるべき原則がどのような手続きによって担保されるかが問題になっている。それは歓迎すべきことであるが、倫理的理想の内実は個々のステークホルダーが自律的に決定しなければならない。「なににの倫理原則ではこうなっているから仕方なくやる」という姿勢こそがEの領域をEの領域として見ることから遠ざかる第一歩なのである。

エシックス・ウォッシングも基本的にこれと同様の問題を抱えている。ハードローで対応すべきものと自主規制で対応するものがあらかじめ決まっているわけではないにもかかわらず、あたかもそのように振舞うことによって、目指すべき倫理的理想を構想するインセンティブを失わせてしまうことそのものが危険なのである。

ここで、企業人や技術者は倫理的理想を考えるためのインセンティブなどもとより持ち合わせていないのではないか、という反論があるかもしれない。企業は

利益のみを志向し、技術者は自分の技術が実装されることのみをめざしているのであって、倫理的理想など考えていないのだ、ということである。しかし、企業や技術者をそのようなものとして考えることこそ臆見(ドクサ)かもしれない。私自身が研究者としてあるIT企業の倫理原則策定の現場を参与観察した経験からすれば、技術者や管理職が利益(ないし技術)と倫理のトレードオフを語るだけでなく、倫理と倫理のトレードオフ(多くの人を幸せにする技術だが、少数者に疎外感を与える可能性がある、など)を意識していることは少なくない。

E課題を真に倫理の問題として考えるにあたっては、制度的な解決だけでは決して十分ではなく、倫理的理想を自分で考えることが必ず含まれる。しかし、私たちは多くの場合、その倫理的な葛藤から生じる思考の芽を、問題をLやSに還元することによって、じゅうぶんに開花する前に摘んでしまっているのかもしれない。倫理の問題はその解決にあたって自分で考えなければならないという苛烈な要求を課すが、それは時間がかかることであり、容易にできるものではない。しかし、そうであるからこそ、私たちは理想と妥協を有意味に語るができるのだし、結果的に自律した存在になることができるのである。

【参考文献】

- ・ 岸本充生, 長門裕介, 朱 喜哲 (2022) 「生活者・データビジネス従事者のELSI課題意識を読み解く」, 『電通報』 2022/08/22 (<https://dentsu-ho.com/articles/8297>).
- ・ 中西崇文 (2017) 『シンギュラリティは怖くない ちょっと落ちついて人工知能について考えよう』 草思社.
- ・ Bietti, E. (2020). From Ethics Washing to Ethics Bashing: A View on Tech Ethics from within Moral Philosophy. Proceedings of the 2020 Conference on Fairness, Accountability, and Transparency, FAT* '20, Association for Computing Machinery.
- ・ Metzinger, T. (2019, August 4). Ethics Washing Made in Europe. Der Tagesspiegel. (<https://www.tagesspiegel.de/politik/eu-guidelines-ethics-washing-made-in-europe/24195496.html>)
- ・ プラトン (1979) 『国家』 藤沢令夫訳, 岩波文庫.

